

## 4 南薩の特色を生かした戦略的野菜産地の育成

### ～ピーマン産地の育成～

#### 成果の要約

- 1 加世田地区で新規就農者の受入体制が構築でき、新規栽培者を確保できた。
- 2 スワルスキーカブリダニやタバコカスミカメなどの天敵の利用が図られ、殺虫剤の散布が少なくなり、安心安全なピーマン栽培に繋がった。
- 3 IoT 機器利用農家は5戸で9台導入し、栽培管理に役立てることができた。
- 4 研修会や現地検討会、巡回指導等により令和3年度の単収は12t/10aと増収が図られた。

#### 1 対象

- (1) JA 南さつま加世田ピーマン部会 15 戸
- (2) JA いぶすきえいピーマン専門部 5 戸

#### 2 課題を取り上げた理由

- (1) 高齢農家が栽培を断念し栽培面積が減少傾向で維持拡大が進まない。
- (2) 比較的若い生産者も多いが、技術レベルの差が大きい。
- (3) 生産に影響を及ぼす病害虫が多く、農薬の使用回数も多い。IPM 技術の普及を図り、安心安全なピーマンづくりを推進する必要がある。
- (4) 高単収を上げるためには、ピーマンの生理・生態に応じた栽培管理が重要であるが装置の自動化や IoT 機器の活用等が遅れている。

#### 3 活動の内容及び成果

- (1) 単収向上のための技術支援



写真1 現地検討会(11月7日)

- ア 定期的な巡回指導や現地検討会を実施し、

栽培管理の徹底を図った。また、月2回土壌及び葉柄中の硝酸態窒素を測定し、施肥改善に役立てた。

- イ 両産地の生産者を集めて合同研修会を実施し、天敵の利用や病害虫対策、温度管理等の理解促進を図った。

- ウ 令和2年には単収向上のための管理マニュアル、令和3年には天敵利用マニュアルを作成配布し、管理技術の向上を図った。



写真2 ピーマン合同研修会(7月5日)

- (2) IPM 技術の普及

ピーマン栽培では、アザミウマやコナジラミ等の害虫の発生も多いことから、実証ほを設置し普及を図ってきた。カブリダニ類については平成23年から、土着天敵のタバコカスミカメは平成30年から実証ほを設置し、普及を図ってきた。現在11戸の農家がこれら天敵を活用している。

天敵を利用していない農家の令和3年度の殺虫剤の使用回数は18.6回であり、一方天敵を利用している農家は13.1回で5.5回少なく安心安全なピーマン栽培に繋がった。

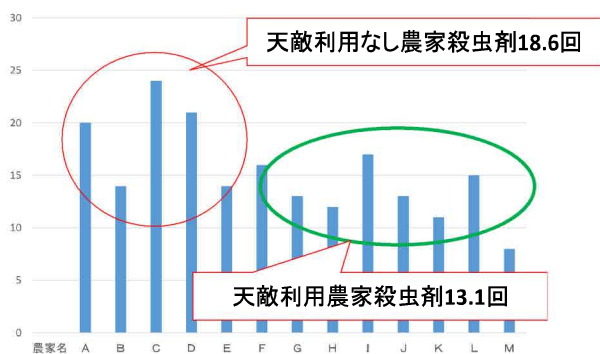


図1 天敵利用の有無による殺虫剤利用回数

### (3) IoT 機器の活用普及

令和元年に南薩地域ピーマン環境制御協議会(県単事業利用)を設立した。農家4戸に環境モニタリング機器5台を貸し出し、環境データの栽培管理への活用を支援した。導入農家はハウス内の気温やCO2濃度の変化をスマホで把握でき管理温度の変更やトラブルの対応など活用が進んだ。

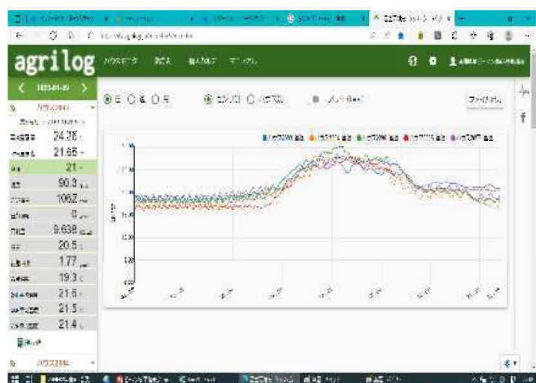


図2 IoT 機器でハウス内環境を把握

### (4) ピーマン新規就農者の確保育成

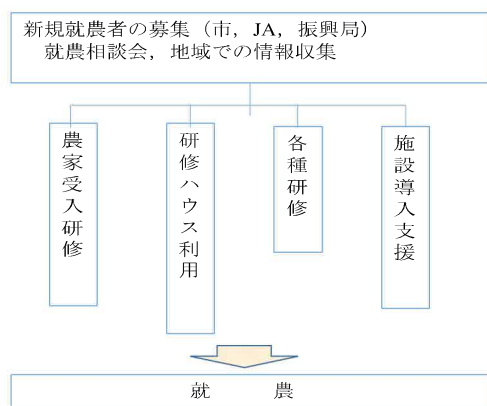


図3 新規就農者確保体制図

年々高齢化により面積が縮小する中、新規就農者を確保・育成が喫緊の課題であることを、関係機関、ピーマン部会と共有し、対策を検討

した。令和3年度には空きハウスを部会で借受け研修ハウスとし、新規就農者1名が栽培に取り組んでいる。また、令和4年5月からは市の助成を活用して、研修生1名が先進農家で1年間の研修に取り組んでいる。

農政普及課では、新規就農者や研修生に対して、基本的な技術を習得するための基礎研修、専門研修を実施した。さらに、ピーマンの指導農業士圃場を訪問し天敵やIoT機器の活用について指導してもらった。

上記2名は来年度事業を活用してハウスを建設し、ピーマン栽培を本格的に開始する予定である。



写真3 指導農業士から天敵放飼の仕方学ぶ

加世田地区の栽培面積は令和3年以降増加しており、令和5年には0.65ha増加し3.65haの見込みである。また、単収も年次変動はあるものの技術支援を実施したことにより、令和3年度は両産地とも12t/10aの単収を上げることができた。

## 4 今後の課題

- (1) 栽培技術の高位平準化  
(目標平均単収 14t/10a)
- (2) 天敵の安定的な活用技術の普及。
- (3) IoT機器のデータと生育調査データをリンクさせた栽培管理技術の普及
- (4) 新規栽培者を安定的な確保

## 5 担当した普及職員 (〇はチーフ)

〇三角 久富木 仁田尾 森山